

パジャマ・パーティー

Balubusting Slumber Party by mbp



- 1 -

「学校じゅうの噂よ。あんたがトッド・マンソンをやっつけちゃったって」

驚き顔のヘザーが、友人のジェニファーに言った。ジェニファーは十四歳。ほっそりしたブロンドの美少女だった。五人の小学校八年生たちが、ベッドの上に固まっておしゃべりしていた。

「でも、彼は十六歳だし、体もでかいし」

マーシャが叫んだ。

「いったい、どんな手を使ったの？」

「そうよ、ジェニー」

サンデイが言った。

「体操だってそんなに得意じゃないのに」

他の女の子たちも頷いた。ジェニファーは答えた。

「あいつのケツを蹴ってやっただけ」

女の子たちはうたぐり深そうな顔つきのままだった。

「わかった。あんたたちにだけ教えてあげる」

ジェニファーは続けた。

「たしかに私はタフでもないし強くもない。女の子にだって負けるんだもの。いったったか、ジ

- 2 -

ヨンの妹の十一歳の女の子と腕相撲して負けちゃったくらい。でも、男の子とは喧嘩して負けたことないんだよ、一度も」

ジェニファーは口を嚙み、友人たちの質問を待った。

「それ、おかしくない？」

十三歳のサマンサがいった。グループのなかで、いちばん体育の出来る少女である。

「男の子に勝って、女の子に勝てないなんて。だいたい、これまで何度男の子と喧嘩したの？」

「数えたことないけど少なくとも二十人。みんな大きいやつばかりで……」

「大きい？」

キャサリンが遮った。

「いったいどうやったの？ そんなに強いんなら、私の兄貴をとちめてやってよ」

「私の従兄弟も」

サリーが言った。グループでいちばん若く、いちばん小さな娘だった。女の子たちは口々に、仕返しをしてやりたい男の子の名前を並べ始めた。

「そろそろ喋らせてくれるかな」

ジェニファーは微笑んだ。

「男の子はたいいてい、私たちより大きいし強い。でも、彼らには私たちにはない大きな弱点が一つある。金玉よ」

「きんたま？」

サリーが訊いた。他の女の子たちがくすくす笑いだした。

「サリー、知らないの？ 金玉とか、ペニスとか」

ヘザーが笑った。キャサリンとマーシャがげらげら笑いながら床を転げまわった。

「え……」

サリーはもじもじした。

「そう。金玉」

ジェニファーは続けた。

「やつらの金玉よ。喧嘩するときには、まずそれを狙うの」

女の子たちは口を嚙み、ジェニファーの言葉に耳を傾けた。

「金玉を攻撃する方法はいろいろある。蹴ってもいいし、膝蹴りしてもいいし、つかんでもいいし、殴ってもいい。とにかく傷めつければ男の子たちは悶絶する。とつても痛いみたいよ」

マーシャが言った。

「じゃあトッドの金玉を……？」

「そう。トッドと口喧嘩になって、あいつ、暴力をふるおうとしたから、膝で蹴り上げてやったの。あいつ、それでもう戦意喪失。ここぞ逃げていった」

「他の男の子たちも、それでやつつけられちゃうものなの？」

サンデイが訊ねた。彼女は小柄だが頑丈そうな、ダークブロンドの十四歳。美しくたくましい脚の持ち主だった。

「そうね。ほとんどの男の子は狂ったようになって、本気で向かってくるの。ここで覚えておくべきことが二、三ある。一つ目。冷静でいること。冷静でないと、確実に金玉を狙うことが出来なくなるから。そして一番大事なことは、力をこめて攻撃すること」

キャサリンはもうすぐ十四歳になる、赤毛の、タフな美少女だった。

「でも、そんなこととして、二度とセックス出来なくなったりしない？ 兄貴の金玉を力いっぱい蹴るなんて出来ないわ。いやな奴だけど、兄貴は兄貴だもん」

ジェニファーは答えた。

「そうね、キャサリン。マイケルは大きくて、あなたより強い。年も上。彼は、そのアドバンテージを使ってるわけだから、あなたもあなたにしかないアドバンテージを使うべきだと思う。私の経験だと、致命的なダメージを受けた男の子はいないよ。みんな、二、三日はひりひり痛むみたいだけど、そのうち直るみたいだから」

「仕返しされたことはないの？」

キョートでちっちゃなサリーが訊ねた。150センチに満たないブルネットの十三歳である。

「二度目は通用しないだろうし」

「何人かの男の子は仕返ししようとした。でも、二度目のほうが実は簡単なの。男の子たちは、

また金玉をやられるのを恐れて、そこを守ることに気をとられるでしょ。だから、他の部分を攻めてやるの。向こうは手か片方しか使えないから、思うようにいなくなるからね。で、他の部分を傷めつけておいて、最後に金玉を狙うわけ」

ジェニファーはくすくす笑った。

「男の子たちの喧嘩って見たことない？ 彼らの喧嘩には不文律があって、金玉だけはねらっちゃいけないことになってるの。私にはとても理解できないけど」

「なんで、あなたにやられた男の子たちは、仕返しするとき、金玉にカバーをつけないのかなあ？」

ヘザーが言った。彼女は十四歳。背が高く、その年齢とは思えないほど発育がよく、並の大人以上に発達した豊かな乳房は男の子たちの注目の的だった。

「それはいい考えね。ヘザー。そんなこと思いついたこともなかった。男の子たちも考えつかないアイデアよ。それはフェアじゃないって事なんでしょうね」

女の子たちは爆笑した。

「じゃあ、喧嘩のコツを伝授してさしあげよう」

ジェニファーの家の外では、男の子たちが襲撃のプランを練っていた。男の子たちは、微かに脅えながら、家のなかをのぞいていた。可愛らしい、半裸の美少女たちがいるだけだった。男の子のなかにはトッドの姿もあった。

「大丈夫だろうな、トッド」

リーダー格の、十七歳のマークが言った。

「またジェニーにやられたりしねえだろうな。サリーにしとくか？」

男の子たちは忍び笑いをした。

「大丈夫だ」

トッドは真っ赤になって言った。

「今度こそは、あのアマ、やっつけてやる」

「ね、聞こえない？」

マーシャが声をひそめた。彼女は十四歳。一見地味な顔だが、頭が良く、ユーモアのセンスもあった。少女たちは、何かというとマーシャにアドバイスを求めるのである。そのマーシャの言葉に少女たちは口を噤んだ。

「何か物音がしたよね」

サマンサが言った。

「泥棒かしら？」

「泥棒が出てくるにはまだ早いんじゃない？」

ジェニファーが言った。

「ママもパパもドアの鍵を掛け忘れたことはないし……。でもまあ、確認しといたほうがいいかもね」

ジェニファーと少女たちは、そっと足音を忍ばせて階段のところに行き、耳をそばだてた。階下に、何人かの男の子の音が響いていた。

「あれはロバート。マークに、トッドもいる」

ヘザーが囁いた。

「殴り込みに来たようね」

ジェニファーは微笑み、少女たちに言った。

「さっき私が教えてあげたことを、実践してみない？」

キャサリンが真先に賛成した。

「賛成！ やっつけちゃおうぜ」

少女たちは四組に分かれ、二階の四つある部屋に入っていく。ジェニファーとヘザーは階段をおりてゆき、ぱっと一階のリビングルームの蛍光灯を点けた。

「ようこそ、少年諸君」

言うなり、くるりと踵を返して階段を駆け上がった。少年たちはその後を追った。

ヘザーはジェニファーの部屋に飛び込み、ドアを閉めた。ジェニファーは両親の部屋に入った。

トッドは、ジェニファーが細い脚を閃かせて部屋に入りドアを閉めるのを見た。トッドは彼女の後を追った。

応接室では、サマンサとキャサリンが静かに侵入者を待っていた。キャサリンはもうやる気満々だった。サマンサは体育が得意で、喧嘩の経験もあった。

ジョンとロバートが部屋に入ってきて、二人の少女に素早く視線を走らせた。二人ともサマンサと喧嘩することは避けたかった（二人とも年上で背も高かったのだが）。キャサリンも、タフな女だという評判だった。さらに、二人の少女が、ナイトガウンがわりのTシャツを身につけただけであったため、二人はとぼんとして立ちすくんでいた。

ジョンは我を取り戻し、キャサリンに向かっていった。サマンサは、まだとぼんとしているロバートに向かって足を踏み出した。

ジェニファーの部屋では、ヘザーとマーシャがポールとマークと対峙していた。二人の少年はともに、よりセクシーでグラマーなヘザーを押し倒す役目を望んだ。マーシャは彼らの好みのタイプではなかったから。二人はじゃんけんをし、その結果、ポールがヘザーを担当することになった。負けたマークだったが、マーシャの何時になくセクシーなナイトガウン姿に興奮した。さあ、お楽しみだ。少年たちは足を踏み出した。

大学の寮に入っているため空き部屋になっているジェニファーの兄の寝室で、サンディとサリは神経を尖らせていた。二人とも、少年が二人部屋に入ってきたのにも気づかなかった。マイケルとステイヴは、二人の小柄な美少女を見てほくそ笑んだ。こいつは楽しみだ。

ジェニファーは静かにトッドと対峙していた。トッドの虚勢は、ジェニファーが微笑んでいるのを見て、急速に萎えていった。彼女はトッドよりも二十センチは背が低く、少なくとも二五キロは体重が軽いはずだった。

不意にジェニファーが詰め寄ってきた。トッドは思わず両手で睾丸を覆った。ジェニファーはがら空きになったトッドの顔面に強い拳骨を浴びせ、続いて向こう脛を思い切り蹴り飛ばした。トッドの両手が睾丸から離れた。すかさずジェニファーは拳を固め、無防備になった彼の睾丸を殴りつけた。

鋭い激痛にトッドは頭がくらくらした。トッドはあやうくバランスをとり、ジェニファーに背中を向け、壁に手をつき、睾丸を守ろうとした。だが無駄だった。ジェニファーは彼の股間に手をのばして強く睾丸を握りしめた。トッドは絶叫した。ジェニファーは彼をベッドに押し倒し、右手で睾丸をつかんだまま、左手でトッドの左腕をねじあげた。トッドは息をすることも出来なかった。もはや彼は、可愛らしい八年生の美少女のなすがままだった。

サマンサはロバートより強かった。ロバートは十五歳で、長身だったがひよろりと痩せていた。サマンサは体育選手のヴァネッサ・アトラーのような体型で、身長は一五〇センチに満たなかったが、二の腕が遅く発達し、筋肉質の脚を持っていた。彼を倒すのに睾丸責めは必要なかった。サマンサのキックは危うく睾丸から逸れたが、ロバートはあつという間に膝をついた。サマンサは失望したようにベッドに腰をおろした。こんなに簡単なことだったなんて、あつけなさすぎる。

ジョンは用心しながらキャサリンに近寄った。彼は喧嘩の経験は十分に積んでおり、たとえ三歳年下の少女が相手とはいえ、敵を嘗めてかかるのは禁物だと心得ていた。キャサリンは脚を一閃させて彼の睾丸を蹴り上げようとした。だがジョンは蹴りをおろし、キャサリンを強くつかみ、ベッドに押しつけようとした。彼は力強く、キャサリンは脚を使うことが出来なかった。だが彼女はジュニアの教えをよく覚えていた。ジョンの無防備な睾丸にパンチを浴びせた。パンチは的中したが、ジョンは持ちこたえた。彼は、脚を動かして、キャサリンのパンチを浴びない位置に股間を移動させた。キャサリンは窮地に陥った。

ヘザーとマーシャの動きは対照的だった。

ポールが近寄ってくるのを見て、ヘザーはわざとリラックスした表情を見せ、招き入れるよう

に腕を広げた。マーシャは腕をあげて防御を固め、なるたけマークに近寄らないようにしていた。

ポールはヘザーの腕のなかに抱かれ、彼女にキスし、彼女の豊かに盛り上がった乳房に手をあてた。ヘザーはにっこりしてポールの股間を愛撫した。ポールのペニスが固く勃起した。ポールがうつろしている隙に、ヘザーはポールのズボンの中に手を滑りこませ、その睾丸を強く握りしめた。ポールは絶叫し、ヘザーの手をふりほどこうとした。だが、ヘザーが睾丸を握りしめる手にますます力を込めたため、ポールは立っていることもおぼつかず、ヘザーに寄りかかって絶叫するばかりだった。

マークが思わずそれに見とれている隙に、マーシャが襲いかかり、思い切り股間を蹴り上げようとした。それは睾丸には的中しなかったが、マークは思わずたじろいだ。マーシャはマークの股間を二度三度と蹴り上げた。マークは床に這いつくばった。見上げると、マーシャの聡明な顔に微笑みが浮かんでいた。

サンディとサリーに襲いかかった少年たちは、思わぬ反撃にショックを受けていた。にたにたとサンディの驚くべき脚線美に見とれていたマイクは、その美しい脚で睾丸を蹴り上げられた。マイクはタフだった。激痛を堪えながら、サンディにつかみかかった。サンディも負けてはいなかった。彼女は攻撃を続けた。彼女の美しい脚が何度もマイクの股間を襲った。そのうち幾つかが睾丸を傷めつけ、マイクは悶絶した。

サリーの相手は、彼女より四〇センチは長身で、十七歳のマイクよりも年上に見えた。サリーはがむしやりに相手の睾丸を攻撃しようと、脚や拳を見舞った。最初は当惑していた相手の少年は、いくつものキックとパンチを睾丸に見舞われ、その苦痛から怒りを爆発させた。彼は、小柄なサリーを両手で人形のように持ち上げた。サリーは持ち上げられても脚をばたつかせ、睾丸蹴りを試みた。さらに彼女は体をよじって相手に十分に近づき、小さな手で思い切り睾丸をつかんだ。ステイプはサリーをつかんだまま、床に這いつくばった。二人はもつれるようにして床に転がった。

ジェニフアーは鏡の前で得意気なポーズを取っていた。その姿は、トッドの眼にもセクシーだったが、ペニスが固くなることはなかった。ジェニフアーのしなやかな肢体や、美しい脚や、長いブロンドの髪を見つめながら、トッドは打ちのめされていた。これほどの屈辱はなかった。大の男が、小柄な美少女に二度も叩きのめされたのだ。彼のプライドは反撃しろと命じていたが、ジェニフアーへの恐怖心のほうが大きかった。彼はベッドで転がったままだった。ジェニフアーが近寄ってきた。

「あんたってほんとに弱虫。五歳の女の子にだって勝てそうにないもんね」

トッドはかっとなったが、身動きできなかった。もはや、彼は十分な罰を受けたのである。ジェニフアーは彼をベッドから引つ張り起こし、部屋から出るよう命令した。

「さて、私の仲間の様子を見物しましょうか」

ロバートは睾丸を両手でつかんで床に突っ伏したまま、ぴくりもしなかった。サマンサに手ひどく傷めつけられ、もはや手向かいする力は残っていないようだった。

ドアが開き、ジェニフアーとトッドが入ってきて、あやうくロバートにつまづきそうになった。ジェニフアーはトッドを床に転がし、サマンサと並んでベッドに腰をおろし、キャサリンの戦いぶりを見守った。

ジョンは小柄だったが凶暴でタフだった。彼は、キャサリンより少しだけ背が高かったが、キャサリンは怯まなかった。組み打ちすら辞さなかった。彼女は、乱暴な兄と何度も喧嘩した経験を持つていたからである。ジョンはなかなか動けないでいた。よい位置取りをしようと体を動かすと、たちまちキャサリンは股間を攻撃してくるからである。ジョンの生殖器はすでに傷めつけられ、立つのがやっとだった。それでも反撃を試みた。キャサリンに襲いかかり、首をしめようとしたのだ。

だがキャサリンは狡猾だった。彼女はジョンの指をつかんでひねりあげた。ジョンは苦痛に身をよじり、キャサリンを放した。キャサリンは一步後ろに下がり、それから脚を振り上げ、鋭い一撃をともに睾丸に浴びせた。彼は体を前かがみに折り曲げた。キャサリンはもう一度、睾丸蹴りを見舞った。ジョンが床にくず折れた。サマンサとジェニフアーが歓声をあげた。応接室は、

少年たちの苦悶の呻きに満たされた。

ヘザーはボールの睾丸から手を放し、彼の背後に回ってベッドに腰をおろした。彼女は両手でボールの片手をつかみ、足でボールのペニスを踏みつけ、美しい脚で彼の胴をしめつけていた。ボールの身長は一九〇センチ近く、体重は九〇キロあったが、彼は長身の八年生の美少女に押さえつけられていた。

ボールは逃げようともがいた。だがちよつとでも身動きすると、ヘザーは容赦なく足を睾丸に打ち込んだ。ときには、足でペニスをいじった。ペニスが勃起したが、そのためにますます睾丸の痛みが増した。

マークは、マーシャに睾丸を蹴られ、床に這つくばったことが信じられなかった。彼は眼鏡をかけた少女にしてやられたことに反狂乱になった。

「その手は二度と通じねえぞ」

マークはよたよたとマーシャに襲いかかった。だがマーシャはうまく相手の力を利用した。ひよいと頭をすくめて彼のパンチをかわし、腹部に強烈なパンチをたたき込み、つづいて膝で思い切り股間を蹴り上げた。マークは呻き、戦意を失った。

マーシャは素早く彼の背後に回りこみ、力いっぱい、爪先で睾丸を蹴り上げた。マークはがっくりと倒れ、息も絶え絶えに泣いた。マーシャは彼の腕をつかんで仰向けにし、思い切り睾丸を

踏みつけた。マークは叫び声をあげることも出来なかった。彼の体は、マーシャが死ぬのではないかと心配になったほど激しく痙攣した。彼はそのまま気絶した。

それを見ていたヘザーがボールの腕を放し、マーシャに向かって拍手した。

サリーは起き上がってステイヴに目をやった。彼はまだ床に転がっていた。彼の股間がだらしなく無防備に視線にサリーの晒された。

小柄だが完璧なプロポーションを持つ美少女はいいことを思いついた。彼女は床に膝をつき、サイのように彼の睾丸に頭突きを食わせた。ステイヴは激痛に絶叫した。サリーはもう一度頭突きを食わせて立ち上がり、大きくジャンプして彼の腹部に着地した。四〇キロに満たない体重ではあったが、ステイヴの息が詰まった。サリーはもう一度ジャンプした。ステイヴの体から力が完全に抜け落ちた。

サリーはステイヴの首に足を絡ませてシックス・ナインの姿勢をとった。ステイヴのズボンを脱がせ、睾丸を剥き出しにし、思い切り掴んだ。耐えがたい激痛がステイヴを襲った。もはやなされるがままだった。彼は悶絶し、絶叫するしかなかった。小柄な十三歳の少女が、あつという間に年上の大男を倒したのだ。サリーは、喜びを押さえることが出来なかった。

マイケルもまた、サンデイの敵ではなかった。彼は、サンデイの敏捷な攻撃を防ぐことが出来なかった。他の少女たちが部屋に入ってきたときも、サンデイの美しい脚はマイケルの睾丸を蹴

り続けていた。キャサリンの眼が大きく開かれた。サンディが傷めつけているのは彼女の兄だったのだ。

「ちよつとサンディ、そいつ、私の兄貴だよ」

キャサリンが興奮して叫んだ。

「私にもやらせてくれる？」

「いいよ」

サンディは微笑んだ。

「ずいぶん強い兄貴だって言ってたけど、ただのへなちよこじやん」

言いおわるやいなや、キャサリンはマイクの睾丸に膝蹴りを食わせた。

「ところで、そいつは誰？」

サンディが、サリーに睾丸をつかまれ悶絶する少年を指さして言った。他の少女たちも知らなかった。

マークが呻くように答えた。

「俺の従兄のステイヴだ。大学三年生の……」

「大学三年生！」

ジェニファーが叫んだ。大学三年生を、あのちっちゃなサリーが！

「大学三年生のくせに、小学校八年生を襲撃したっていうの？」

「ちよつと帰省中で、俺たちの計画を話したら、是非自分も参加したいと……」

マークは屈辱に震えていた。大学三年生の従兄だけではない。自分も小学校八年生の少女に、叩きのめされてしまったのだから。

「こんにちは、ステイヴ」

ジェニファーがにやにやしながら、ステイヴに囁きかけた。

「私の兄貴は、あんたの同級生の何人かと知り合いなの。ここで何が起こったか、兄貴に教えとくね。兄貴はおしやべりだから、今夜のことをみんなに言いふらすだろね。あつという間に大学中に噂が広まるよ。どうする？」

ステイヴは返事をしなかった。少女たちがいつせいに笑った。少年たちはうなだれるしかなかった。

サリーが手を離してからも、ステイヴはなかなか立ち上がることに出来なかった。

少年たちは、屈辱にまみれ、よたよたとジェニファーの家から出ていった。少女たちはうきうきとパーティを続けた。来週になれば、あらたな噂が学校じゅうに広がってゆくことだろう。